

源氏物語随想 (伊勢式年遷宮)

産経新聞にキーンさん「お白石持」に参加という見出しで、伊勢式年遷宮に日本文学者ドナルド・キーン氏(91)が八月十日行われた同行事に参加された由。

これは遷宮せんくうの新しい社殿の周りに白石を敷くというもので、氏曰く「遷宮の伝統を守ることは、日本人であることを守ることにつながる。」と、なまな日本人よりも我が国の歴史、心に通ずる氏にしている言である。

周知のごとく氏は日本を愛するのあまり、二〇一一年の震災を機に日本に帰化し、今や紛れもなく日本人なのである。

キーン氏の日本への感心は、一九四〇年に、比較的安価であったという理由で手にし読み始めた『源氏物語』訳本がその最初であったという。

成る程、昔々読んだ『源氏』では、六条御息所ろくじょうのみよすけのことで伊勢に関する段がある。フィクションとはいえ平安当時の人情仕来たりなど髪髻まうみづとさせる話で誠に興味深いものである。

桐壺帝が上皇となり朱雀帝の

御代となったので、慣例として伊勢の齋宮いそのみやと加茂社の齋院も交替することになった。

古来齋宮というのは、神宮の大御前に仕える皇女のこと、第十代崇神天皇以来歴代天皇即位の際、未婚の皇女のうちより選り、神宮に奉斎せらるる習わしとなっていたのである。

その折の伊勢齋宮には六条御息所の姫君にと決まり、となれば三年以内に伊勢へ下らねばならない。

このところ愛する源氏の君に些ちかつれなくされ、あまつさえ女性同士の根深い嫉妬など心の葛藤に、かく上はいつそのことと姫君と共に伊勢へ下る決心をするものの、女としての強い思い。揚句は我知らず生霊いきりょうと成って、ライバルの女性を恨み殺して了しまうという凄まじさである。

遂に姫君と共に伊勢へ向う日、正妻あねのつゑ葵上をその故に亡くし乍らも、いざとなれば矢張り恋しい御息所のもとへ、――振捨てて今日は行くとも鈴鹿川すずか 八十瀬やそせの浪に袖は濡れじや……



皇大神宮(内宮)宇治橋



・・・(私を捨てて伊勢へ行っておしまいですか、五十鈴川の川瀬の音を聞きながら後悔の涙に袂を濡らすのでは...)と言いだると、御息所^{みよところ}応えて―鈴鹿川^{すずか}八十瀬^{やそせ}の浪に濡れ濡れず 伊勢まで誰か思いおこせむ―と泣く泣く伊勢へと下って行くのである。

更に斎宮といえは浮かんでくるのは時代溯り持統天皇の御代、その持統との皇位を巡つての確執ゆえに悲話をきざむことになる大津皇子^{みこ}のこと。悲劇前夜、当時斎宮として伊勢に仕える姉君大伯皇女^{おおくのひめみこ}を慕い、遠路遙々^{はるばる}と訪ね行き、暫し^{しば}の逢瀬の後、都へ帰って行く皇子へ詠める歌二首―わが背子を 大和へやると小夜ふけて あかとき露にわが立ち濡れし― 二人行けど ゆき過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらん―と、愛しい弟君を思いやるのである。果せるかな帰りついた都で、謀叛の罪をきせられ事実上誅^{ちゆう}された大

津。その屍は、後日二上山に葬られることになるが、その折、皇女の哀傷しましたし御作歌^{みうた}として―うつそみの人なる我や明日よりは二上山^{ふたかみやま}を弟背^{いろせ}と我が見む―と詠っている。

現代伊勢方面へ近鉄線がその麓を過ぎるたび、小生にして遠き時の彼方を偲び二上山の頂きに目を奪われるのが常である。



二上山

(次月号へ続く)